

立命電友会

吾、衣笠を原点と知って

北陸電気工業株式会社

執行役員 営業副本部長

高倉 和雄
(昭和四十四年卒)



私が井上和夫先生の自動制御研究室を何とか卒業させていただき、一端のエレクトロニクス屋として抱負を秘め、電子部品メーカーに入社したのは昭和四十四年春であった。六ヶ月間の製造現場実習の後、同期の技術者達は研究開発部や、製造技術部へそれぞれ送り込まれたが、私はひとり、営業部への配属となった。「何故、どうして」と畑違いの部署に夢半ば破れた感が否めなかった。が、折からの不

況の中では他社への選択肢は無いに等しく、モンモンとした気の重い新入社員スタートであった。

私は大学四年間を等持院西町に在る、衣笠寮で寮生活をおくった。元は、民間アパートであったものを、大学側が買いつけ改装した木造二階建二十室から成る寮は、二人部屋であった。理工学部、土木、機械、電気工学部生の他、新たに経済、経営学部生も初入寮していた。部屋は二間続きで戸は開け放たれ、学部、学年を超えての歓談、政治や思想についての議論、しまいに放歌と夜が白む事など日常茶飯事であった。暖をとる練炭火鉢で軽い一酸化炭素中毒をひきおこし、隣人に助けられた事、余りの煩さに堪りかねた隣人とのトラブル等、懐しい。衣笠寮で忘れてはならぬ行事が幾つか有っ

た。そのひとつに深夜の「キモダメシ」がある。寮生活にも少しづつ慣れて来た頃、寝入りバナをたたき起こされた新入寮生は、無言で龍安寺の境内を抜け、ひとりずつ衣笠山に登られるのである。途中の御陵脇から二回生、前年にキモダメシをされた一年先輩達が趣向をこらして威すのである。

「名前」「出身地」「趣味」「恋人の有無」など質問攻めにあいやがて頂上へ、腕があがらなくなる程の腕立伏の後、焼酎の洗礼をつける。この行事で新入寮生と先輩の方々の距離がぐんと近づく事は言うまでもない。この様な垂直、水平関係の裸のつき合いを通じ、私は理工学部生のある事に気がついた。あくまでもイメージである事と誤解を恐れずに披露すると、化学工学部生は、答を出すのに一ヶ月かかる。土木工学部生は半年、機械工学部生は二週間、我ら電気工学部生は数秒。(スキッチを入れて回路動作チェックは、結果が数秒で出る)これに比べ経済、経営学部生は時間が曖昧で、好く言えばフレキシブルである。論客が多く政治、経済、社会、歴史と多岐に渡って守備範囲が広い。私は自分に備わって無い物にただ感心するばかりで毎日が新しい事、興味が尽きない事、考えさせられる事が連続の、衣笠での大学生活であった。

さて、営業配属でモンモンとした日々をおくっていた私であったが、時に、家電業界はカラーテレビの開発黎明期を迎え、画質の安定、向上に開発の全力が注がれていた。電子部品ベースでは、フォークス電圧調整用の高耐圧部品や、CRTアノード電圧レギュレーター・6BK4をいかに無くして、物品税率の低いオールソリッドステートにするか各社鎗を削る中、いろいろなアイデア部品が検討されていた。一方自動車業界は排ガス規制に対応する為、機械制御から電子制御への開発移行期を迎えMCU開発は、温度センサ、圧力センサ、位置センサなど新しい電子部品のビジネスチャンスが大きく拡がるうとしていた。いつしか私は、ユーザー技術者との面談が多くなり、新しい材料を探したり、文献を調査したり、設計の一部を補完したりと、市場・製品開発が面白く、楽しくなり時間を忘れ、夢中でのめり込んでいった。時には集金日を忘れ上司から大目玉を喰う事もあった。当時の開発スピードは今とは比較にならないが、技術的ブランクボックスが殆んどなく、のびのびとした開発をベースに、人間関係が構築出来る良き時代であった。開発の思いが叶い、新製品に量産投資が行われるように成った頃、私は会社の柱となる製品の市場開発という自分には出来ない営業をやるうと、使命感に目覚めていた。以来三十余年、マーケティング・販売戦略の仕事に従事している。

現在のデジタル・エレクトロニクス業界はキーデバイスの標準化が急速に進み、差別化が図りにくい構造となっていました。新製品

は直ぐに価格競争に巻き込まれ、中国産品が限りない過剰在庫と、環境破壊を増大させている。私どもの電子部品も、他社とは違う差別化が問われる真の競争時代に突入している。その解決策として、テクノロジ・マーケティングが最も重要でないかと考えている。セットメーカーの開発設計部に人材を派遣しての連携ビジネスや、欧米の半導体メーカーの最先端技術といかに交流するなど、常に自社製品の開発ロードマップを創る事がポイントである。抵抗器やスキッチといった成熟部品でも、材料技術やプロセス技術を蓄積しながら緻密に開発しないと直ぐに真似られ、シェアや利益が維持出来なくなってしまう。

私は市場に一番近いところで仕事をさせてもらっている事を思う時、大学生活でいろいろな心と心を開いて語り合った「衣笠」が、自分の原点であると痛感する。マーケティングの情報の質は、現場に足を運び、キーマンを見つけ、そのひとつと直接話し合い、感覚を磨かねば、情報は点から線、線から面、面から形のある経営のツールにはならない。それらのノウハウ全てが「衣笠」であると知るのである。受験で衣笠寮に泊った事のある実弟は、縁有って今、BKで教鞭を執らせていただいている事を申し添えて「衣笠」へ心から感謝を申し上げこの寄稿を結びたい。

山本 茂先生の記憶

齋藤

豊

(通称優)(旧 疋田豊)

平成十五年十月一日第二十二号立命電友会の会報により山本 茂先生の訃報に接し哀悼の意を表する者の一人です。

旧制中学生にて海軍航空隊に志願し合格、練習生を卒業し実施部隊にて交戦中突如終戦武装解除され、その後九月中旬迄残務整理し復員、また十七歳の出来事でした。

海軍甲種飛行予科練の先輩達は毎日あの大空に特攻作戦として参加、軍神として散華され今だに一年に一回生存航空兵達は冥福を祈っておる訳です。

終戦、武装解除と我々は急激な環境の変化に暫く茫然とした毎日でした。

その後噂により各大学で復員軍人の編入試験が実施されると言う事で立命館専門学校工学部電気科に無事入学した次第です。昭和二十年十二月頃と思います。

山本 茂先生は交流理論、電磁気学等を教わったのですが、先生は国民服で頭は丸坊主でした。私は、当時所持金は復員手当位なもので両親は既に無く、兄はおりましたが自分の生活で精一杯でした。入学金は復員手当等充当しましたが学費がなくパン売りを思い立ち恥じを感んで稼ぎまくりました。

山本 茂先生に売った記憶は有りませんが三亀、平野先生に売った事は憶えております。

当時は昭和二十年四月入学の学生と昭和二十年十二月の復員組と一緒になる訳で学生衣服も無く海軍の三種軍装そして飛行靴の出しちでした。

傍では異常だったのでは無いかと思っております。

当時は全員で百五十名位だったと思っておりますが卒業の時は百名位でした。又当時は旧制中学は四年卒でしたのでいまでは高校一年卒で専門学校又は大学の予科に入学出来ました。

卒業後中小企業へ就職しましたが月給が三千円〜五千円位でした。百円札ですので袋の厚みがありましたがやはり自分の力で頑張り度いの一心で昭和二十七年二十四歳で事業を創業致しました。

皮肉にも山本 茂先生に電磁気学等は学んだものの非常に難しい課目でした。一番苦手の過渡現象に取組み開発したのがオートマチック・ボルテージ・スタビライザー(自動電圧調整器)でした。開発に非常に苦労したのですが山本茂先生に御指導を賜り度く思っていたのですが当時山本 茂先生の

課目では私の成績が悪くて恥ずかしかつたので三亀先生に御指導を仰ぎ精度±0・2%位の精密な商品を作り上げる事が出来ました。人間と言う者は自分の欲になれば大したもので鉄共振型の音や波形(第三高調波)等に悩みましたが再度教科書を幾回となく復習し、同期の木村君が京大の助手として勤めておられたので紹介を依頼し林 重憲研究室また林 千博研究室にスタビライザーを納入させて貰い精度の良いのにお褒めの言葉を頂いた事を憶えております。

処が事業は資本、経営、社員、と揃って成り立つのですが最初は唯、技術のみ敗残兵にならぬ様随分苦労したものです。

その後ソフト関係の会社を設立(株)トーセ(齋藤 茂五十四年電気科卒)現在長男が大いに社長として手腕を発揮し大証、東証第一部に上場しております。次男は現在(株)東亜セイコーの社長として活躍しております。

我々教え子が七十五歳になっておりますので殆んどの先生(山本茂先生が最後)が逝去されたのではないかと思います。

然しあの古い校舎を写真で偲び又現在の立派な校舎と比較しつつもついその時代の青春が蘇って来ます、学友もかなり逝かれたのではないかと偲びつつ(株)トーセ、(株)東亜セイコーの会長として人生を全うしたいと思っております。最後に山本 茂先生その他の先生のご冥福をお祈り致します。

新任のご挨拶

電子情報デザイン学科 小倉 武

電子情報デザイン学科の開設にあわせて、この四月に着任しました。たいへん活気のある、まさに旬を感じさせる立命館大学の一員に加えていただいたことに、身の引き締まる思いを持っています。大学勤務は初めてですので、見ることも、聞くことすべてが新鮮に感じられる状況です。さらには、この予想を超える新鮮さは、やはり大学改革に成功した立命館大学故かとも思い、改革を成し遂げた、あるいは成し遂げつつある諸先輩の教職員や卒業生の方々に感謝するとともに、私自身も変革しなければと思っている次第です。

私、神戸出身で、大学院修了以来、関東にあるNTTの研究所に永年在籍していました。着任以降、久々の関西での生活を少しみつつあります。NTTの研究所では、時代とともに進展していた集積回路(LSI)技術の活用を前提として、革新的あるいは効率のよい情報通信処理システムを如何に実現するかという観点から、ハードウェアやソフトウェアにかかわる研究を行ってきました。シリコンシステムアーキテクチャといわれる研究分野に相当します。

いま、日本の社会は元氣と自信を失った状態が続いています。この状況を打ち破って夢のある社会を取り戻すため、核となる人材と個性的な技術を産業界に送り続ける

ることこそが、大学の責務として重要だと思っております。もちろん、そうしたやすいことではありませんが、皆様方のお力添えをいただきつつ、私の持てる力を総動員してチャレンジしたいと考えています。具体的には、シリコンシステムアーキテクチャにかかわる個性的な技術を題材として、工学的な実現技術を重視して研究や教育を進めることにより、核となる人材の育成をめざしたいと思っております。どうぞ、よろしく、お願い致します。

電気電子工学科 久保 幸弘

このたび二〇〇四年四月より、専任講師として電気電子工学科に着任いたしました。私は本学の卒業生であり、一九九三年に電気電子工学科に入学、一年間は衣笠キャンパスで、残り八年をびわこ・くさつキャンパス(BKC)で過ごしました。理工学部で衣笠キャンパスに通った最後の年代であります。

卒業研究以降は、杉本末雄教授(システム制御工学研究室)のご指導のもと、主にGPS(衛星測位システム)に関する信号処理とその応用について研究を行いました。在学中は学内外のTA、非常勤講師、また本学の一号助手、RA等、貴重な経験もさせて頂きました。学位取得後は三菱電機でいわゆる「カーナビ」の開発に携わっておりましたが、本年、ご縁に恵

まれ母校でお世話になることとなりました。

さて、これまでは研究・開発業務が活動の中心でしたが、講師として着任し少ないながら学部の講義科目も担当させて頂くようになりました。現在は、これまでの立場とは違った大きな責任感を感じながら、非常勤講師や助手のアカデミックな経験と、企業での経験を融合した活力ある講義を目標にしております。が、初講義の直前、ネクタイを締めて少々の緊張とともに生協の食堂に行ったところ、レジのおばさんに学生と思われ「今から就職活動か？」と声を掛けられたことは忘れられない笑い話です。

研究活動としましては、目下のところ引き続きGPS測位アルゴリズムとその応用に関して研究を行っています。GPSはよく知られた軍事衛星であり、最近では携帯電話等でもGPSを利用してユーザの位置を知ることができます。また、ヨーロッパや日本でも独自の衛星やGPSの補強システムが計画され、正確な自分の位置を知るといふ行為がますますポピュラーになりつつあり、その応用分野は幅広いものとなっています。今後は、GPSのような衛星測位システムに関する信号処理を主軸として、その通信方式や、測位システム応用での情報処理といった分野も視野に入れて研究を進めていきたいと考えております。

今後ともご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしく願います。

吉川 雅弥

この四月より任期制講師として電子情報デザイン学科に着任いたしました。私は一九九二年に立命館大学電気電子工学科に入学、その後、一号助手・ポスドクと合計十二年間、立命館大学に在籍していました。したがって今年は十三年目です。そうした中で、あらためて「新任の挨拶」をさせて頂くのは多少恐縮します。

私が着任した電子情報デザイン学科は、二〇〇四年度に新しく新設された学科であり、寺井教授、山内教授をはじめ九名の教員が在籍し、SoC (System on a Chip) の開発に必要な専門知識と一定の設計経験をもった人材育成を第一義課題として取り組んでいます。さて、そのような新学科ですが、学科を立ち上げるというのは、非常に多くのことを決めていく必要があります。例えば、学生実験などはその代表的な例です。電気電子工学科の学生実験は、長い歴史の中で諸先生方が改訂に改訂を重ね、非常に完成度の高い教科書・実験内容になっております。しかし、本学科では実験のテーマから使用するCADツールの選定など全てゼロから決めていく必要があります。また、教科書の作成の他に、使用するCADツールのマニュアルの作成も必要になります。このCADツールは、CADベンダーが用意したものがありません。ただし、一つのツールに付き、何百ページにも及ぶ英語のマニュアルのため、講義にそのまま使用することが出来

ません。そのため、使用するツールを決めた後、そのツールチェーンに沿ったマニュアル作成が必要になります。そのような中で、日々責任感を感じておりますが、それにもまして、学科の立ち上げに携われるやりがいや喜び、本学で教育や研究に携われる幸せを噛み締めております。

最後にになりましたが、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしく願います。

峯元 高志

本年四月より任期制講師として電子情報工学科に着任をいたしました。どうぞよろしく御願いました。本年でBK C開学十年になります。私はずいぶん早くその開学の年に立命館大学理工学部電気電子工学科に入学しました。入学当時は自分が大学の教官になろうとは夢にも思いませんでした。着任して半年経った現在、大きく躍進・発展を続ける立命館大学で教育・研究に携われることの意義の大きさを知り、幸せを感じております。

話は前後しますが、私は学部・修士・博士課程を立命館大学のお世話になりました。三回生の時に飛び級進学可能なことを知り、チャレンジ精神もあって大学院進学を決定しました。修士・博士課程共に、濱川圭弘教授・高倉秀行教授の研究室におきまして、次世代型のCu(InGa)Se₂薄膜太陽電池の研究に従事しました。また、連携大学院制度を活用しまして、松下電器産業中央研究所(現先行テ

バイス開発センター)において、根上卓之主任研究員(立命館大学客員教授)にご指導頂き、大学と企業の両方で充実した研究生活を送りました。博士号取得後は、渡米し、デラウェア大学エネルギー変換研究所にポスドクとして引き続き薄膜太陽電池の研究に携わりました。その後二〇〇三年一月に二十一世紀COEプロジェクトのポスドクとして立命館大学に戻り、本年四月より講師に着任し現在に至ります。現在も薄膜太陽電池の研究を続けており、さらには、マイクロマシン用電源としての微小集積型太陽電池や、革新的な低コスト化が望める球状シリコン太陽電池の研究開発を進めております。さて、最後に十年前と現在のBK Cを比較しますと、立命館の躍進とともに、学生達の活気も随分と高まってきている様に感じます。私としましては、活気のある大学、立命館のさらなる発展に、微力ながらも貢献できたらと思ひ、ますますの精進を決意しております。今後ともご指導、ご鞭撻の程どうぞよろしく御願致します。

九州・沖縄支部開催

服部 征記

(昭和三十七年卒)

平成十六年六月十二日、博多駅前のステーションプラザホテルにおいて九州・沖縄支部の総会が開催された。

本部から、新しく会長に就任された荒木敏会長と高山茂教授が出

席された。

総会に先立ち、高山教授から、立命館の組織・歴史・電友会の活動状況・理工学部及び電気電子工学科の現状と変遷等について、プロジェクトを使っての説明があった。

総会では、支部の活動状況・課題・今後のあり方、等についての意見が交換され、昨年、APUの見学を兼ねた別府での開催が好評であった事から、今後も見学会等を組み入れる事を考える、等活発な意見交換がなされた。

引き続き、任期満了に伴う新支部長の選出に入り、新しい支部長に森下明憲氏(四十四年卒)が選ばれた。

来年には、日本で四番目の国立博物館が、大宰府に開館する事から、その見学を兼ねて、来年の総会も福岡で開催する事を決め、閉会した。



立命電友会 第四回総会開催

今年はアテネオリンピック開催年でありますとともに、四回目を迎えました立命電友会定時総会の年でもあります。

六月五日(土)、立命電友会総会は大津プリンスホテル「淡海の間」において、百十六名の会員の参加を得て開催されました。本総会を迎えるに当たって、五月八日(土)の役員会において議題の整理と次期体制についてあらかじめ検討が行われました。

総会は高山茂事務局長の司会のもと、まず加納久雄会長の挨拶で始められました。立命電友会創立十周年記念総会が平成十三年十月十九日(土)、京都全日空ホテルにおいて三百四十名の参加者を迎えて開催され、大変盛況の中、無事に終了する事ができたことこの報告と諸事協力いただいたことへの謝意が述べられました。

続いて寺井秀一学系長の挨拶があり、本年開設された電子情報デザイン学科の紹介と学系の近況報告および就職状況についての報告がありました。

石井英敏副会長を議長に選出し議事に入り、まず高山茂幹事より事業報告があり、電友会創立十周年記念企画の報告が詳細になされました。また、会計報告が中西恒彦幹事(会計)よりなされ、監査結果が前田稔夫会計監事より報告

されました。

続いて次期役員改選に入り、会長には荒木敏氏(昭和三十四年卒)が満場一致で承認されました。副会長には前任の津田川勝氏に島津良昭氏と鈴木良一氏が新しく加わり、事務局長を川畑良尚氏にお願いすることが承認されました。

その後、荒木敏新会長より就任の挨拶があり、会員の益々の親睦を図り、今後の立命電友会の発展を促進する等、力強い決意が述べられました。

議事終了後は講演会が開催され、立命館大学教授土岐憲三先生より「地震と文化財」について大変興味深い講演を頂きました。総会終了後、同ホテルにおいて懇親会が和やかに行われました。

最後になりましたが、びわこくさつキャンパス(BKC)は今年で開設十周年を迎えました。これを記念し、当日は開会に先立ちBKCの見学会を催しました。多数ご参加いただきありがとうございました。



新役員紹介

会長

荒木 敏 (昭和三十四年卒)

副会長

島津 良昭 (昭和三十五年卒)

鈴木 良一 (昭和三十七年卒)

津田川 勝 (昭和四十四年卒・教員)

顧問

辻村 寛 (昭和二十八年卒・元教員)

加納 久雄 (昭和三十年卒)

中島 一郎 (昭和三十一年卒)

池田 育弘 (昭和三十二年卒)

苺屋 公明 (昭和三十三年卒・元教員)

井上 和夫 (昭和三十三年卒・元教員)

浦山 隆 (昭和三十三年卒・元教員)

会計監事

前田 稔夫 (昭和三十年卒・元教員)

横井 猛彦 (昭和五十九年卒)

事業幹事

田中 寿雄 (昭和三十五年卒)

堤 誠 (昭和三十六年卒)

山下 正之 (昭和四十一年卒)

中西 恒彦 (昭和四十一年卒・教員)

津田 見眞 (昭和四十四年卒)

加藤 義彦 (昭和五十五年卒)

高山 茂 (昭和五十九年卒・教員)

田口 耕造 (平成三年卒・教員)

吉川 雅弥 (平成四年卒・教員)

川畑 良尚 (平成六年卒・教員)

久保 幸弘 (平成九年卒・教員)

幹事

小松 康廣 (教員)

今井 茂 (教員)

小山 仁平 (昭和二十五年卒)

樋口 昌利 (昭和三十年卒)

藤岡 孝造 (昭和三十年卒)

西村 明男 (昭和三十一年卒)

金森 徳雄 (昭和三十一年卒)

奥村 隆昭 (昭和三十一年卒)

小松 明 (昭和三十二年卒)

松井 新三 (昭和三十二年卒)

岩木 保雄 (昭和三十四年卒)

大森 将丈 (昭和三十五年卒)

中野 修平 (昭和三十五年卒)

南 能寿 (昭和四十二年卒)

瀬見 英利 (昭和四十四年卒)

石井 英敏 (昭和四十五年卒)

天野 佳則 (昭和四十六年卒)

高杉 雅昭 (昭和四十六年卒)

正田 純一 (昭和四十六年卒)

矢島 俊行 (昭和四十六年卒)

荻田 泰廣 (昭和四十六年卒)

小西 正秀 (昭和四十七年卒)

稲田 耕史 (昭和五十一年卒)

島田 義一 (昭和五十一年卒)

吉松 繁 (昭和五十四年卒)

小川 弘之 (昭和五十五年卒)

杉本 幸生 (昭和五十六年卒)

澤村 陽 (昭和五十六年卒)

久保村 浩 (昭和五十九年卒)

- | | | | | | |
|-----------------|---------------|---------------|---------------|----------------|--------------------|
| 諏訪 正樹 (平成四年卒) | 森岡 泰雄 (平成四年卒) | 威徳井 浩 (平成七年卒) | 藤山 直之 (平成九年卒) | 川上 知之 (平成十二年卒) | 峯元 高志 (平成十三年院卒・教員) |
| 荒木 義彦 (昭和四十四年卒) | 浮田 宏生 | 小倉 武 | 小野 雄三 | 笠原 健一 | 亀井 且有 (昭和五十三年卒) |
| 北澤 敏秀 | 齊藤 茂 | 左貝 潤一 | 篠田 博之 | 杉本 末雄 | 高倉 秀行 |
| 寺井 秀一 | 名西 徳之 | 沼居 貴陽 | 福井 正博 | 藤枝 一郎 | 藤田 智弘 |
| 藤野 毅 | 溝尻 勲 | 森本 朗裕 | 山内 寛紀 | 山田 廣成 | 荒木 努 |
| 佐々木 誠 | 文 雅司 | | | | |

同窓会だより

紫山会 (昭和四十三年卒)

四月四日 (日) 電気工学科四十三年卒OB会 (紫山会) が、恩師の辻村先生、前田先生、苅屋先生、浦山先生それに五十九年卒の高山先生を迎え、春爛漫の五條坂の閑静な料亭で開催されました。世話役の池田氏より開会の挨拶のあと、来賓を代表され電気磁気学の辻村先生から「学生時代は師弟の関係であった皆さんが、卒業後三十六年を経過した今、誰が生徒か、先生か、年を重ねる毎に親近感を覚えます。景気は上向きといっても実感はなく、年寄りの住みにくい時代になっています。皆さんもそろそろ年金生活の域に入られます。声を大にして年寄りが住みやすい世の中に最後のひと仕事を頑張ってください。」とのユーモアあふれる挨拶があり、前田先生の乾杯で懇親会に移りました。一年ぶり、中には三十六年ぶりの再会もありました。

和やかな雰囲気の中、現役の五十九年卒高山先生からパワーポイントを用いた最近の母校 (目まぐるしく変革する立命館の様子) の紹介があり、教育現場のスピードは衣笠の古き良き時代には想像もできない速さを感じました。企業戦士として汗をかいた団塊の世代

は高齢化し少子化の波で住みにくい世の中になりました。

青春時代京都で学び、遊んだ仲間と近況報告や昔の思い出 (教授にレポートを窓からほかさされたこと等々) 心置きなく語り合い青春時代にタイムスリップ、二時間の予定が一時間三十分近く延長し名残惜しい中での散会となりました。仲間と雨の上があった京都の町家を抜け、会場近くの西国十七番札所六波羅蜜寺、十六番札所の清水さんに健康を祈願し、八坂の塔に歴史の重みを感じながら、ふと「理想は高く姿勢を低く、いつも心に太陽を持って、ゆっくりとがっかりと、理論を貫いて実践に生き、実践を通して理論を究め、前へ前へと進もう!」勇気の湧く言葉を思い起こすとともに、改めて、校友と京都の良さを心のフィルムに刻んだ一日でした。世話役の池田



さん・佐々木さん・鎌倉さんありがとうございました。今回ご集のみなさま又の再会を楽しみにしています。四十三年電気工学科卒の皆さんへ

心のケアーに来年の紫山会 おこしやす 大社修二

二九電友会

代表 平尾 良一

昭和二十九年 (一九五四) 弥生三月、等持院理工学舎を学友百余名と共に築立って五十年、思えば戦後の混乱期から最悪の就職難時代を乗り越えて、このたび節目とすべき「同窓会」を迎えることが出来ました。

まさしく「喜びも苦しみも幾星霜」の半世紀であったと思う。

この五十年を振り返るべく二九電友会を風薫る五月二十日、祇園料亭で開催の運びとなりました。定刻、開会のセレモニーに入り、冒頭にすでに黄泉へと旅立った三十名に思いを馳せながら黙祷を捧げ、次いで会幹事による経過・会計報告などの議案を提出し型通りの了承を得て開幕へと移りました。

なお、今回の参加者は十三名で、ほぼ固定したメンバーでしたが、出欠返事によれば「体調不良」「病氣加療中」など高齢者がありがちな健康上の理由による不参加や連絡不能者二十名 (住所不明返



卒業50周年記念 電友会 於 美登幸

送) など年を重ねるごとに、このような理由による学友が増加傾向にあるようです。

さて、懇親の宴では京料理と美酒に口元も滑らかに相変わらぬ酒豪ふりと、話題豊富な下戸が入り交り、時のたつのも忘れがちで宴半ばに料亭主人の、粋な計らいとして三味の音に小唄、端唄と続き全員で手拍子の合の手で最高潮に達し、締めはギオン小唄の合唱で京情緒を満喫して次回の再会を約して閉会となりました。なお、今後の立命校友会、電友会総会などの諸行事へ参加協力を申し合わせ京土産を手に三々五々帰途につきました。

参考までに二九電友会の最近五年間の会合経過を添えさせておきます。

二九電友会 平成十一年六月

赤穂岬ホテル

校友会 (合同) 平成十一年十一月

一月 大津プリンスホテル

同窓会予告

- 二九電友会 平成十二年十一月 京都タワーホテル
校友会 (合同) 平成十三年五月 別府APU大会
二九電友会 平成十四年五月 京都料亭
電友会十周年 平成十四年十月 京都全日空ホテル
二九電友会 平成十五年五月 京都料亭
校友会 (合同) 平成十五年十一月 一月 ホテルグランヴィア 京都

事務局便り

昨年六月の浦山研、辻村・前田研の合同同窓会には六十名以上の参加者のもと、盛況に執り行うことが出来ました。今年も十二月四日 (土) に東山区の「ホテルりょうぜん」にて合同同窓会を予定しています。(一泊可)。同窓会に久しく離れておられた先輩・後輩の皆さんにも是非参加していただければと願っています。詳細が決まり次第、改めて案内状をお送りします。

浦山研同窓会 加藤 義彦
辻村・前田研同窓会 藤井 力広

立命電友会会報二十四号の発行にあたり、ご寄稿いただきました皆様方には、心より御礼申し上げます。

住所及び勤務先等の変更がございましたら、ご連絡のほど宜しくお願いいたします。